

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 11-228478
(43)Date of publication of application : 24.08.1999

(51)Int.Cl. C07C 47/19
B01J 23/02
C07C 45/72
// C07B 61/00

(21)Application number : 10-034535 (71)Applicant : MITSUBISHI CHEMICAL CORP
(22)Date of filing : 17.02.1998 (72)Inventor : TAKAHASHI KAZUNARI
KAWAKAMI TETSUGO
TSUBOI AKIO
CHIYOU SAKOU

(54) PRODUCTION OF DIMETHYLOLALKANAL

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To remove high-boiling by-products and produce the subject compound useful as a raw material for polyurethane resins, etc., in high purity by condensing an alkanal or an α -alkylacrolein with formaldehyde and then extracting the resultant reactional product solution with a specific ether.

SOLUTION: A ≥ 3 C alkanal or ≥ 3 C α -alkylacrolein having two hydrogen atoms on the carbon atom at the α -position is reacted with formaldehyde in the presence of a basic compound and water to provide a reactional product solution containing an α,α -dimethylolalkanol. The resultant reactional product solution is then extracted with a 5-9C ether to remove high-boiling by-products such as a trimer of the α,α -dimethylolalkanol as an ether solution.

LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

(書誌+要約+請求の範囲)

(19)【発行国】日本国特許庁(JP)
 (12)【公報種別】公開特許公報(A)
 (11)【公開番号】特開平11-228478
 (43)【公開日】平成11年(1999)8月24日
 (54)【発明の名称】ジメチロールアルカナールの製造方法
 (51)【国際特許分類第6版】

C07C 47/19
 B01J 23/02
 C07C 45/72
 // C07B 61/00 300

【FI】

C07C 47/19
 B01J 23/02 X
 C07C 45/72
 C07B 61/00 300

【審査請求】未請求

【請求項の数】4

【出願形態】OL

【全頁数】4

(21)【出願番号】特願平10-34535
 (22)【出願日】平成10年(1998)2月17日

(71)【出願人】

【識別番号】000005968

【氏名又は名称】三菱化学株式会社

【住所又は居所】東京都千代田区丸の内二丁目5番2号

(72)【発明者】

【氏名】高橋 和成

【住所又は居所】岡山県倉敷市潮通三丁目10番地 三菱化学株式会社水島事業所内

(72)【発明者】

【氏名】川上 徹悟

【住所又は居所】岡山県倉敷市潮通三丁目10番地 三菱化学株式会社水島事業所内

(72)【発明者】

【氏名】坪井 明男

【住所又は居所】岡山県倉敷市潮通三丁目10番地 三菱化学株式会社水島事業所内

(72)【発明者】

【氏名】張 鎮江

【住所又は居所】岡山県倉敷市潮通三丁目10番地 三菱化学株式会社水島事業所内

(74)【代理人】

【弁理士】

【氏名又は名称】長谷川 曜司

(57)【要約】

【課題】アルカナール又は α -アルキルアクリレインとホルムアルデヒドとを反応させてジメチロールアルカナールを生成させ、これを酸化してジメチロールアルカン酸を製造するに際し、ジメチロールアルカン酸の晶析率を向上させる。

【解決手段】ジメチロールアルカナールを含む反応液をC₅ ~ C₉ のエーテルで抽出してジメチロールアルカナールの三量体などの副生物をエーテル溶液として除去する。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 α -一位の炭素原子に2個の水素原子を有する炭素数3以上のアルカナール又は α -アルキルアクロレインとホルムアルデヒドとを、塩基性化合物及び水の存在下に反応させて得られる α , α -ジメチロールアルカナールを含む反応生成液を、炭素数5~9のエーテルで抽出して α , α -ジメチロールアルカナールの三量体などの副生物をエーテル溶液として除去することを特徴とするジメチロールアルカナールの製造方法。

【請求項2】反応原料のアルカナールの炭素数が3~9であり、 α -アルキルアクロレインの炭素数が4~10であることを特徴とする請求項1記載のジメチロールアルカナールの製造方法。

【請求項3】アルカナール又は α -アルキルアクロレインとホルムアルデヒドとの反応を、アルカナール又は α -アルキルアクロレインに対し化学量論量の0.75~20倍のホルムアルデヒドを添加して行うことを特徴とする請求項1又は2記載のジメチロールアルカナールの製造方法。

【請求項4】アルカナール又は α -アルキルアクロレインとホルムアルデヒドとの反応を、アルカナール又は α -アルキルアクロレインに対し2~80倍モルの水の存在下に行なうことを特徴とする請求項1ないし3のいずれかに記載のジメチロールアルカナールの製造方法。

詳細な説明

【発明の詳細な説明】

【0001】

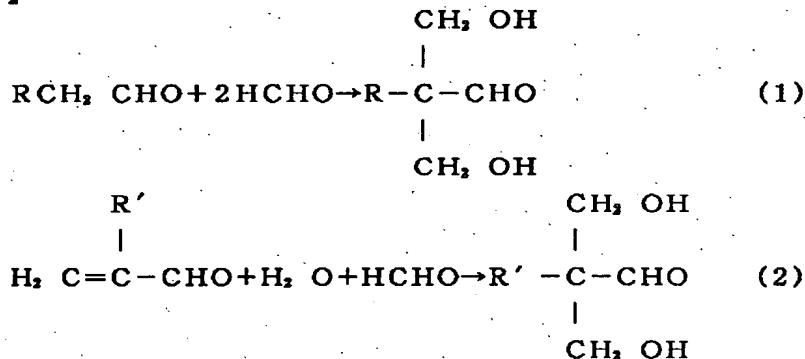
【発明の属する技術分野】本発明はアルカナール又は α -アルキルアクリレインとホルムアルデヒドとを反応させて、 α , α -ジメチロールアルカナールを製造する方法の改良に関するものである。詳しくは本発明は、反応生成液から、副生した α , α -ジメチロールアルカナールの三量体などの高沸点の副生物を除去して、 α , α -ジメチロールアルカナールを高純度で取得する方法に関するものである。

【0002】

【従来の技術】 α -位に2個の水素原子を有する炭素数3以上のアルカナール又は α -アルキルアクリレインとホルムアルデヒドとを、水酸化ナトリウムなどの塩基性化合物及び水の存在下に縮合させると、下記の反応式に従って α , α -ジメチロールアルカナールが生成することは公知である。

【0003】

【化1】



生成したジメチロールアルカナールは、ホルムアルデヒドと更に反応してトリメチロールアルカンとなる。

【0004】ジメチロールアルカナールを酸化すると、ポリウレタン樹脂やエポキシ樹脂の原料として有用なジメチロールアルカン酸が生成する。通常はアルカナール又は α -アルキルアクリレインに大過剰のホルムアルデヒドを反応させ、得られた反応生成液から未反応のホルムアルデヒドなどを蒸留により除去したのち、これに過酸化水素を添加してジメチロールアルカナールをジメチロールアルカン酸に酸化し、酸化反応液から生成したジメチロールアルカン酸を晶析させて取得する。

【0005】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、この方法で得られた反応生成液には、主生成物のジメチロールアルカナール以外に、その三量体などの高沸点の副生物が相当量含まれている。これらの副生物は、反応生成液を酸化し、次いで生成したジメチロールアルカン酸を晶析させる際に、ジメチロールアルカン酸の溶解度を増加させて晶析収率を低下させ、また得られるジメチロールアルカン酸の品質を低下させることが判明した。従って本発明は、アルカナール又は α -アルキルアクリレインとホルムアルデヒドとを縮合させて得たジメチロールアルカナールを含む反応生成液から、ジメチロールアルカナールの三量体などの副生高沸点物を除去する方法を提供しようとするものである。

【0006】

【課題を解決するための手段】本発明によれば、 α -位の炭素原子に2個の水素原子を有する炭素数3以上のアルカナール又は α -アルキルアクリレインとホルムアルデヒドとを、塩基性化合物及び水の存在下に反応させて得られる α , α -ジメチロールアルカナールを含む反応生成液を、炭素数5~9のエーテルで抽出して α , α -ジメチロールアルカナールの三量体などの副生物をエーテル溶液として除去することにより、三量体などの高沸点副生物の少ないジメチロールアルカナールを取得することができる。

【0007】

【発明の実施の形態】本発明でホルムアルデヒドとの縮合反応に用いるアルカナールとしては、 α -位の炭素原子に2個の水素原子を有する直鎖又は分岐鎖の種々のものを用いることができ

る。アルカナールの炭素数は3~9、特に3~8であるのが好ましい。例えばプロピオンアルデヒド、n-ブチルアルデヒド、n-ペンチルアルデヒド、n-ヘキシリアルデヒド、n-ヘプチルアルデヒド、n-オクチルアルデヒドなどのような炭素数3~8の直鎖状アルデヒドを用いる。

【0008】また、 α -アルキルアクリレインも直鎖又は分岐鎖のアルキル基を有する種々のものを用いることができるが、アルキル基の炭素数は1~7、特に1~6であるのが好ましい。例えばメタクロレン、 α -エチルアクリレイン、 α -n-プロピルアクリレインなどのような、 α -位に炭素数1~6の直鎖状アルキル基を有するアクリレインを用いる。これらのアルカナールやアルキルアクリレインは所望ならばいくつかを併用してもよい。

【0009】塩基性化合物としては、常用のものを用いればよく、例えば水酸化ナトリウム、水酸化カリウム、水酸化カルシウム、水酸化バリウム、炭酸ナトリウム、炭酸カリウム、炭酸水素ナトリウムなどのような、アルカリ金属又はアルカリ土類金属の水溶性の水酸化物、炭酸塩、重炭酸塩などが用いられる。また、トリエチルアミンやトリプロピルアミンなどの第3級脂肪族アミンや塩基性陰イオン交換樹脂などを用いることもできる。塩基性化合物は、反応原料のアルカナール又はアルキルアクリレインに対し、通常0.03~0.3、好ましくは0.05~0.25倍のモル比となるように用いられる。塩基性化合物の使用量が少な過ぎると、反応速度が著しく低下する。逆に使用量が多過ぎると、トリメチロールアルカンの副生量が増大し、ジメチロールアルカナールへの選択性が低下する。

【0010】ホルムアルデヒドは反応原料のアルカナール又はアルキルアクリレインに対し、前記の(1)式又は(2)式で示される化学量論量の0.5~25倍、好ましくは0.75~20倍となるように用いる。特に化学量論量の5~15倍となるように用いるのが好ましい。ホルムアルデヒドとしては通常はホルマリンを用いる。水は反応原料のアルカナール又はアルキルアクリレインに対し通常2~80モル倍、好ましくは4~40モル倍となるように用いる。特に10~40モル倍となるように用いるのが好ましい。水の使用量が少な過ぎると反応速度が低下し、かつアルカナールを原料とした場合には α -アルキルアクリレインが副生する。逆に使用量が多過ぎるとトリメチロールアルカンの副生量が増大し、ジメチロールアルカナールへの選択性が低下する。反応は、アルカナール又はアルキルアクリレインにホルマリンと塩基性化合物の水溶液を加え、攪拌下、反応系を液相に維持しつつ、0~100°C、好ましくは30~80°Cに、数分~数時間保持すれば容易に進行する。反応器としては攪拌槽型反応器や管式反応器などを用いればよい。

【0011】反応生成液は、蒸留して共存しているアルカナールやアルキルアクリレインなどを回収したのち、エーテルで抽出して、含まれているジメチロールアルカナールの三量体などの高沸点副生物をエーテル溶液として除去する。抽出溶媒のエーテルとしては炭素数5~9のもの、例えば1-ブチルエチルエーテル、2-メトキシ-4-メチルペンタン、エチルプロピルエーテル、1-メトキシ-2,2-ジメチルプロパン、1-メトキシベンタン、1-メトキシ-3-メチルブタン、3-メトキシベンタン、1-メトキシ-2-メチルプロパン、2-メトキシ-2-メチルプロパン、2-メトキシブタン、1-メトキシブタンなどのような炭素数5~7の脂肪族エーテルや、1-メトキシ-2,3,4-トリメチルシクロブタン、1-イソプロピル-2-メトキシ-3-メチルシクロブタン、1-イソプロピル-3-メトキシシクロブタン、1-エチル-2-メトキシ-3-メチルシクロブタン、1-sec-ブチル-2-メトキシシクロプロパン、1-メトキシ-2,4-ジメチルシクロペンタン、1-ブチル-2-メトキシ-3-メチルシクロプロパン、1-イソプロピル-2-メトキシシクロブタン、1,3-ジメチル-2-メトキシシクロペンタン、(1-メトキシ-2-メチルプロピル)シクロプロパン、1-メトキシ-4-メチルシクロヘキサン、1-エチル-2-メトキシシクロペンタン、1-メトキシ-2-メチルシクロヘキサン、1-メトキシ-3-プロピルシクロブタン、(1-メトキシプロピル)シクロブタン、1-メトキシ-3-メチルシクロヘキサンなどのような炭素数7~9の脂環族エーテルが用いられる。

【0012】抽出操作そのものは常法に従って行えばよい。すなわち抽出は回分方式でも連続方式でも行うことができ、また多段抽出も好ましい。反応生成液に対する抽出溶媒の比率(容量比)は、通常0.1~20、好ましくは0.5~10である。また、抽出操作は通常0~100°Cで行えばよいが、0~80°C、特に10~60°Cで行うのが好ましい。抽出に要する時間は通常は少くとも3分間であり、5分間以上が好ましい。この抽出操作により、反応生成液中のジメチロールアルカナールの三量体などの副生高沸点化合物が選択的に抽出溶媒のエーテル中に抽出される。従ってこの抽出操作を経た反応生成液を常法により酸化し次いで晶析すると、高純度のジメチロールアルカン酸が高い晶析率で得られる。

【0013】なお、上記の抽出操作で得られたエーテル溶液中には、三量体などの高沸点副生物に

加えて主生成物のジメチロールアルカナールも若干抽出されている。従ってエーテル溶液からエーテルを蒸発させて除去したのち、残渣をメチルイソブチルケトンなどの三量体などの高沸点副生物に対して強い溶解力を示す溶媒に溶解し、この溶液を水で抽出して含まれているジメチロールアルカナールを水溶液として回収するのが好ましい。

【0014】上記によりジメチロールアルカナールの三量体などの副生高沸点化合物が除去されたジメチロールアルカナール水溶液からのジメチロールアルカン酸の製造は、常法に従って行えばよい。水溶液中のジメチロールアルカナールの濃度は、5~60重量%、特に20~50重量%の範囲に調整されているのが好ましい。酸化反応は、ジメチロールアルカナールに対して過酸化水素を0.5~2モル倍、好ましくは0.7~1.5モル倍加えて、20~100°C、好ましくは40~80°Cに保持すればよい。反応に要する時間は通常5時間ないしはそれ以上である。なお、酸化反応に供するジメチロールアルカナール水溶液中のホルムアルデヒド量は、ジメチロールアルカナールに対して30モル%以下、特に5モル%以下となるように調整されているのが好ましい。これによりジメチロールアルカン酸のメチロール基と蟻酸とのエステル化反応による副生物の生成を低減できる。

【0015】ジメチロールアルカン酸を含む反応生成液は、硫酸などで中和してジメチロールアルカン酸を遊離させたのち、減圧下で水を蒸発させて除去し、蒸発残渣に有機溶媒を加えて濾過して硫酸塩などの不溶物を除去し、ジメチロールアルカン酸の有機溶媒溶液を取得する。有機溶媒としてはメチルイソブチルケトン、メチルエチルケトンなどのジアルキルケトンや、酢酸エチル、酢酸ブチルなどの酢酸エステル等を用いればよい。有機溶媒の使用量は、通常ジメチロールアルカン酸100重量部につき50~400重量部である。ジメチロールアルカン酸の有機溶媒溶液は、次いで冷却してジメチロールアルカン酸を晶析させる。冷却は10°C以下、特に5°C以下となるまで行うのが好ましい。

【0016】

【実施例】以下に実施例により本発明を更に具体的に説明するが、本発明はこの実施例に限定されるものではない。

実施例1 内容積300mlのガラスフラスコに、ホルムアルデヒド水溶液(濃度30.5%)117.06gと、n-ブチルアルデヒド50.4gを仕込み、40°Cに加温した。これに11.19gの苛性ソーダ水溶液(濃度20%)を、攪拌下、pHが9~10.5の範囲になるように少しづつ加えて反応させ、pHが7になるまで攪拌を続行した。反応終了後、60°Cで減圧蒸留して未反応のn-ブチルアルデヒドと副生α-エチルアクリレインを除去した。室温の蒸留残渣を分液漏斗に移し、同容量のtert-ブチルエチルエーテルを加え、振とう機で10分間激しく攪拌したのち静置して2層に成層分離させた。上層のエーテル層を除き、下層の水相に再びtert-ブチルエチルエーテルを加えて前回と同様にして抽出を行った。このようにして4回抽出操作を反復し、得られたエーテル溶液を合せて30mm Hgの減圧下にエーテルを留去させた。液温が60°Cになるまでエーテルを留出させ、残留物約20gを得た。この残留物に同容量の水を加え、60°Cで30分間攪拌したのち、これにメチルイソブチルケトン40mlを加えて10分間激しく攪拌した。静置して2層に成層分離させ、ジメチロールブチルアルデヒドを含む水相を取得した。この水相と先に抽出処理を経た反応液とを合せ、蒸留して水の一部を除去し、ジメチロールブチルアルデヒドの濃度が約30%の水溶液12.1gを得た。この水溶液中には、当初の反応液中の三量体以上の高沸点副生物の約23%が残存していた。この水溶液に30%過酸化水素水溶液62.1gを加え、60°Cで5時間攪拌した。

【0017】次いで反応液に98%硫酸2.6gを加えたのち、20mmHgで水が留出しなくなるまで減圧蒸留した。蒸留残渣にメチルイソブチルケトン130mlを加え、80°Cに加熱した。80°Cで濾過したのち、濾液を攪拌しながら氷冷し、約2°Cに1時間保持してジメチロールブタン酸の結晶を析出させた。保冷した17Gのガラスフィルターで濾過した。ジメチロールブタン酸の晶析率は80%であった。

【0018】比較例1実施例1と同様にしてホルムアルデヒドとn-ブチルアルデヒドとを反応させ、反応液から未反応のn-ブチルアルデヒドと副生したα-エチルアクリレインを蒸留して除いた残液に、過酸化水素水を加えて60°Cで5時間攪拌した。次いで実施例1と同様に後処理して、ジメチロールブタン酸を取得した。ジメチロールブタン酸の晶析率は71%であった。